

これからの診療放射線技師会

井戸 靖司

公益社団法人日本診療放射線技師会 副会長



本会の今後を考えると、過去を振り返る必要がある。私は理事6年（副会長4年）の任期を終了し、役員を退くこととした。後進に道を譲ると聞いてはいいが、自分の任務は完了し、新しいメンバーが日本診療放射線技師会を盛り上げてくれると確信しているからである。私が本会役員になったきっかけは、熊谷会長時代の会を二分した激しい意見の応酬があったからである。ある意味、私を育ててくれたのは熊谷元会長であったのかもしれない。今、現職を降りるに当たり、自分なりの総括をここに書き記すことが必要と思い、私の最後の巻頭言としたい。

やはり、熊谷会長時代の評価をしなくてはならない。中村会長時代の末期には技師会に息苦しさを感じていた会員は、熊谷会長が脚光を浴びて就任したとき、技師会は変わると皆、新しい夜明けを感じたものである。次々に打ち出される認定や技師格に、必死についていこうと会が活気付いた。熊谷元会長は全国津々浦々まで講演に回り、酒を酌み交わして技師会の未来を熱く語られたのが懐かしく思い出される。しかし、その気持ちは私にとって長続きしなかった。何ともすっきりしない日本診療放射線技師会出版会問題、著作権訴訟、会員を相手取った訴訟、独善的な理事会・総会運営と、書けばきりが無い。このような事例だけを列挙すればとんでもない会長という印象だが、功績も多数あることを確認する必要がある。生涯教育の分野で、会員に自己学習とそれに見合った認定制度を積極的に構築されたのは大いに評価できる。技術学会と関係改善を図り共同認定機構を立ち上げたことは、大きな功績といえるのではないかと。また施設認定制度も構築され、被ばく低減施設認定や臨床実習施設認定などは先進的な取り組みといえる。技師会が中心となって先進的な施設を全国に広めていく方策は今後も重要であり、そのさきがけとなった。

私個人に与えた影響は、熊谷元会長の方向性は別にして、排他的で会員の意向を無視した活動に技師会とはなんだろうという素朴な疑問と怒りであった。このように感じたのは私だけでなく、全国にもそのように感じていた会員がいることを知り、非常に頼もしく思ったものである。その一部が現執行部として会を運営しているが、当時の仲間の気持ちを忘れることなく、当時の気持ちを糧として会運営をしてきたつもりである。今、活動を共にした仲間の名前と顔が一人一人思い出される。感傷的な表現だが、30数年前の学生時代に戻ったような感覚である。彼らは仲間というより「同志」という表現が合致する。青臭く言えば、青春を感じさせてくれたひとときだった。このような時をくれた技師会と仲間へ感謝である。

この先は四年制教育・疑義照会と、どうしても技師法改正を中心テーマとして活動しなくてはならない。医療スタッフの教育について診療放射線技師は恵まれている方で、臨床検査技師と臨床工学技士の両方の国家試験受験資格が得られるダブルライセンス大学が出現している。大学の生き残りを懸けて法の抜け穴を探したようなシステム構築には、医療専門職教育とはこのようなものでいいのかと失望を感じている。また地元岐阜県で、三年制短期大学の診療放射線技師養成を画策している学校法人が出現してきた。四年でなく三年で診療放射線技師国家試験受験資格を得ることのできる学校をキャッチフレーズにしようとしている。なんと浅ましいことか。まだまだ、私の戦いは続くのである。ただ、自分のためでなく、私たちが必要としている患者さんのためにもうひと踏ん張りする決意で、私を支えてくれたたくさんの会員、仲間へ感謝して副会長を辞することとする。